

地域における子育て支援に関する現状と課題

— 子育てサロンを利用している母親の育児ストレス —

The Present Conditions and Issues of the Child care Support in the Community.

— Parenting Stress of Mothers using Child-rearing Salons —

坂本 保子

要旨

本研究では、地域の子育て支援に関する現状と課題として子育てサロンを利用している母親を対象に育児ストレスと子育て支援の課題を検討した。育児ストレスは、年齢の高い母親の親役割を困難にさせるような【子どもの気が散りやすい/多動である】といった子どもの特性と関連していた。育児負担を中程度抱えている母親は【親役割によって生じる規制】がある。母親のストレスを的確に把握し、母親がリフレッシュできるような支援が求められる。また子どもの発達上の問題ある場合は、専門家による支援や社会資源の活用などして、地域社会で様々な世代の母子や家族が虐待を予防し健康的な子育てを実現できるような子育てへのサポートや地域子育て支援拠点の設置を検討していく必要がある。

I.緒言

現代の子育ては、少子高齢化、育児の孤立、コミュニティの崩壊、などの課題があり、政府も様々な支援対策を講じてきた。しかしながら働く女性の育児不安や育児負担を抱えている母親にとっては十分に充実した施策が行われているとはいえない。地域子育て支援拠点事業によるとその背景には、3歳児未満の約6割～7割は家庭で子育て、核家族化、地域のつながりの希薄化、子どもの数の減少、生まれ育った地域以外での子育ての増加が挙げられる¹⁾。育児ストレスは、虐待を促進する要因になりうるため孤育や虐待を早期発見するには、

子育て中の親子が気軽に集い、相互交流や子育ての不安・悩みを相談できる場の提供として子育て世代包括センターと連携できる地域子育て支援拠点の設置が必要であると考えます。

子どもの虐待は、2016年5月児童福祉法の改正により児童の主体的権利が確認された。しかし、相次ぐ児童虐待による痛ましい事件が後を絶たない。全国の相談件数では、2019年は約19万3千件であり、2020年では約20万5千件である²⁾。本県の虐待による死亡は平成25年度では約820件、本市は約210件であった。令和2年度では、本県で約1700件、本市は約

580 件、いずれも増加傾向となっている

3). 本市児童相談所で取扱っている相談内容は、心理的虐待が大きな割合を占めており、次いで身体的虐待・ネグレクトの件数が多く、通報者は家族や友人、近隣住民であり、虐待者は、本県全体では実父・実母が多く、本市では実母が大きな割合を占めている⁴⁾。虐待する母親は精神的健康であるが育児に対して精神的ストレスが大きくなり、要因として増大する育児不安、育児での迷いや自信のなさ、子育て負担感を訴えている^{5~7)}。また母親の育児負担感の軽減が虐待を防ぐためには必要⁶⁾であり、虐待予防には地域支援に加え、母親自身の問題を母親自身が取り組める方向へと解決する必要がある⁸⁾。

本市では、子育て世代包括センターが平成 30 年 10 月に開設され、取り組みには、①妊産婦および乳幼児の実情の把握②妊娠・出産・育児に関する相談並びに情報提供、助言および保健指導③支援プラン策定、包括的支援の実施④妊娠出産包括事業の実施⑤保健医療又は福祉関係機関との連携調整となっている。子育て支援は、保健所、ファミリーサポートセンター、子育て支援センター、子育てショートステイ、児童館、放課後児童クラブ、子育てサロンなどを中心に支援が行われている⁹⁾。しかしながら虐待に至る前に育児の孤立化や育児不安の早期発見・早期対応については、児

童相談所以外での相談体制が十分とはいえないことが推測される。

以上のことから、多様化する家庭の子育てニーズに対する支援や虐待に対する早期発見・支援が必要であり、子どもが健全と育まれる環境づくりと子育て支援組織間で連携を取り子育てネットワークの拡充が求められる。

そこで、本研究は、地域における子育て支援に関する現状と課題として子育てサロンを利用している母親を対象として、育児ストレスと子育て支援の課題を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．研究方法

1．対象

対象は、本市の子育て支援を利用している就学時前の子どもを持つ母親 27 名である。

2．調査期間

調査期間は、2019 年 7 月～2020 年 12 月に実施した。

3．研究方法

子育てサロンを利用している就学時前の子どもを持つ母親に無記名で自己記入式質紙調査を実施した。調査票回収方法は郵送法とした。

4．調査項目

子育てサロンを利用している母親の年齢、性別、子どもの人数、職業の有無、家

族構成、子育て支援者利用などについて、また育児ストレスについて Parenting Stress Index（以下 PSI）（日本語版）を使用した。PSI は、米国の心理学者 Abidin によって開発された¹⁰⁾。それをもとに兼松らが日本語版を作成した¹¹⁾。PSI の 78 項目は、「子どもの特徴」と「親の特徴」の 2 つの側面から構成されている。

【子どもの側面】は、38 項目からなる 7 つの下位尺度、【親の側面】は 40 項目からなる 8 つの下位尺度で「まったくその通り」から「まったく違う」の 5 段階評価で得点が高いことはストレスを意味する自記式質問紙である。尺度の信頼性・妥当性は奈良間らによって、検証されている¹²⁾。

5. 分析方法

すべての変数に対して有効な値を持っているケースのみ分析に使用した。その上で、データの記述統計を行い、年齢構成や婚姻状況、家族構成、PSI 下位尺度得点を算出した。次に、子育てに関する調査項目と PSI 得点【子どもの側面】【親の側面】の下位尺度の統計解析を行った。得点分布比較には、Mann-Whitney U 検定および Kruskal-Wallis 検定分析を行った。有意水準は 5% 未満とし、両側検定を行った。解析は、SPSS 日本語版バージョン Ver.27 を用いた。

6. 配布および回収方法

子育てサロン利用者の母親には、文書で

調査の説明を行い、調査の同意が得られた対象者に無記名自記式質問紙を配布した。いずれの回収も、回答後の質問紙は、シール付きの封筒に入れ封後に料金後払い法により回収し、回収後は、返送された調査票は鍵のかかる場所で保管した。

7. 倫理的配慮

本研究の目的と方法、個人情報保護、同意の拒否の自由、調査にかかる時間や負担、結果の公表および苦情の問い合わせについて明記し、同意を得て実施した。研究は、所属機関の倫理委員会の承認を得て実施した（19-09）。

Ⅲ. 結果

質問紙調査は、27 名の母親から回答を得られ（回収率は 36.0%）であった。

1. 子育てサロン利用者の対象者の属性（表 1）

対象の母親は 27 名で、25 歳～29 歳が 40.7% で最も多く、次いで 30 歳～34 歳が 25.9%、20 歳～24 歳が 22.2%、35 歳～39 歳が 11.1% であった。居住地域は東北で、職業は、専業主婦が 51.9%、会社員が 33.3%、パート・アルバイト・自営業が 7.4% であった。同居家族では、核家族世帯が 85.2% を占め、配偶者ありが 81.5% であった。

表 1 基本属性

		N=27	
		n	%
年齢	20歳～24歳	6	22.2
	25歳～29歳	11	40.7
	30歳～34歳	7	25.9
	35歳～39歳	3	11.1
居住地	東北	27	100
職業	専業主婦	14	51.9
	会社員	9	33.3
	パート・アルバイト	2	7.4
	自営業	2	7.4
同居家族	単独世帯	3	11.1
	核家族世帯	23	85.2
	非親族を含む世帯	1	3.7
配偶者	あり	22	81.5
	なし	5	18.5

2. PSI 下位尺度得点

PSI 下位尺度の平均値および標準偏差については表 2 に示す通りである。

表 2 PSI 下位尺度の得点

N=27		
子どもの側面	平均値	標準偏差
C1 親を喜ばせる反応が少ない	13.11	3.19
C2 子どもの機嫌の悪さ	12.74	6.79
C3 子どもが期待通りにいかない	7.56	2.86
C4 子どもの気が散りやすい/多動	10.85	4.62
C5 親に付きまとう/人になれにくい	9.67	4.10
C6 子どもに問題を感じる	6.93	3.72
C7 刺激に敏感に反応する/物に慣れにくい	6.19	2.22
親の側面	平均値	標準偏差
P1 親役割によって生じる規制	25.93	7.00
P2 社会的孤立	18.81	3.80
P3 夫との関係	10.96	5.26
P4 親としての有能さ	23.63	5.00
P5 抑うつ・罪悪感	7.78	3.26
P6 退院後の気落ち	9.85	4.20
P7 子どもに愛着を感じにくい	5.56	2.55
P8 健康状態	7.26	2.07

3. 属性と子どもの側面 PSI 下位尺度の得点 (表 3)

年齢と子どもの側面の下位尺度の得点では【子どもの気が散りやすい/多動】($p < .05$) で有意差を認めた。多重比較の結果では、35 歳～39 歳で 25 歳～29 歳より平均値が大きかった。配偶者の有無では、子どもの側面の【親に付きまとう/人になれにくい】【刺激に敏感に反応する/物に慣れにくい】($p < .05$) で有意差を認めた。「配偶者なし」が「配偶者あり」よりも平均値が大きかった。

職業では、子どもの側面では、【親を喜ばせる反応が少ない】($p < .05$) で有意差を認めた。多重比較の結果では、「専業主婦」・「会社員」に対して有意に高く、「会社員」が「専業主婦」より平均値が大きかった。

家族内サポートレベルでは、子どもの側面では有意な差は認めなかった。

地域における子育て支援に関する現状と課題 子育てサロンを利用している母親の育児ストレス

表3 属性と子どもの側面PSI下位尺度の得点

N=27

子どもの側面		C1 親を喜ばせる反応が少ない			C2 子どもの機嫌の悪さ			C3 子どもが期待通りにいかない			C4 子どもが気が散りやすい/多動			C5 親に付きまとう/人になれにくい			C6 子どもに問題を感じる			C7 刺激に敏感に反応する/物に慣れにくい		
		平均値	標準偏差	P値	平均値	標準偏差	P値	平均値	標準偏差	P値	平均値	標準偏差	P値	平均値	標準偏差	P値	平均値	標準偏差	P値	平均値	標準偏差	P値
年齢	20歳～24歳	12.67	3.27		14.50	8.04		7.83	2.71		12.83	2.79		12.17	5.08		7.70	4.41		7.00	2.45	
※1	25歳～29歳	14.09	3.59	ns	12.55	7.17	ns	7.09	3.15	ns	8.00	3.82	*	7.91	3.02	ns	6.82	3.84	ns	5.82	2.36	ns
	30歳～34歳	12.86	2.91		10.71	4.23		7.86	2.85		11.43	4.72		9.57	3.91		6.14	2.04		6.00	2.00	
	35歳～39歳	11.00	1.73		14.67	9.87		8.00	3.46		16.00	4.58		11.33	4.73		7.67	6.35		6.33	2.52	
配偶者	あり	12.77	3.01	ns	11.86	6.35	ns	7.32	2.93	ns	10.55	4.85	ns	8.73	3.44	*	6.41	3.58	ns	5.73	1.88	*
※2	なし	14.60	3.91		16.60	8.08		8.60	2.51		12.20	3.56		13.80	4.55		9.20	3.83		8.20	2.68	
職業	専業主婦	11.50	2.27	*	13.14	7.17	ns	7.93	2.94	ns	11.21	5.04	ns	10.21	4.17	ns	7.29	4.00	ns	6.57	2.02	ns
※1	会社員	15.00	3.31		11.20	6.20		6.67	2.69		8.67	3.64		7.56	3.04		6.22	3.34		5.44	2.45	
	パート・アルバイト	15.50	2.12		17.50	12.02		8.00	4.24		12.50	2.12		12.00	7.07		8.50	6.36		7.00	4.24	
	自営業	13.50	4.95		12.00	2.82		8.50	3.53		16.50	0.70		13.00	2.82		6.00	2.82		6.00	0.00	
家族内サポート※1	とても得られる	12.67	2.08	ns	13.00	8.71	ns	8.00	3.00	ns	11.00	5.29	ns	12.33	6.42	ns	8.33	4.50	ns	6.67	2.30	ns
	まあまあ得られる	15.67	4.72		17.00	9.00		8.00	3.00		11.00	4.35		12.33	5.68		8.33	4.50		8.33	3.78	
	あまり得られない	13.11	3.17		12.89	6.59		7.67	3.08		11.28	4.72		9.11	3.30		6.72	3.81		5.89	1.87	
	全く得られない	11.00	1.73		7.33	1.53		6.00	1.73		8.00	5.19		7.67	4.61		5.33	2.30		5.33	2.30	

※1 Kruskal-Wallis検定, ※2 Mann-Whitney U検定, **: p<.001, *: p<.05, ns: not significant

4. 属性と親の側面PSI下位尺度の得

かった。

点（表4）

家族内サポートレベルでは、【夫との関

親の側面PSIストレス下位尺度と属性

係】（p<.05）で有意差を認めた。多重比

についての結果では、年齢と職業では有意差は認めなかった。

較の結果では、「まあまあ得られる」・「全く得られない」に対して有意に高かった。

配偶者の有無では、【退院後の気落ち】

「まあまあ得られる」が「全く得られな

（p<.05）で有意差を認めた。「配偶者あ

い」より平均値が大きかった。

り」が「配偶者なし」よりも平均値が大き

表4 属性と親の側面PSI下位尺度の得点

N=27

親の側面		P1 親役割によって生じる規制			P2 社会的孤立			P3 夫との関係			P4 親としての有能さ			P5 抑うつ・罪悪感			P6 退院後の気落ち			P7 子どもに愛着を感じにくい			P8 健康状態		
		平均値	標準偏差	P値	平均値	標準偏差	P値	平均値	標準偏差	P値	平均値	標準偏差	P値	平均値	標準偏差	P値	平均値	標準偏差	P値	平均値	標準偏差	P値	平均値	標準偏差	P値
年齢	20歳～24歳	25.83	6.43		19.83	5.00		10.40	6.15		27.67	5.75		8.83	3.60		10.33	5.32		6.17	2.99		8.00	2.10	
※1	25歳～29歳	27.82	8.81	ns	18.82	3.03	ns	11.80	6.43	ns	21.64	4.39	ns	6.36	3.17	ns	8.91	4.44	ns	5.73	2.87	ns	7.18	2.27	ns
	30歳～34歳	25.14	4.88		18.71	3.68		9.43	2.30		22.29	3.86		8.14	2.04		9.57	3.31		4.43	0.79		7.00	2.00	
	35歳～39歳	21.00	4.00		17.00	5.57		12.67	6.11		26.00	4.00		10.00	4.58		13.00	2.65		6.33	3.51		6.67	2.08	
配偶者	あり	25.55	7.44	ns	18.18	3.57	ns	9.95	4.15	ns	22.73	4.13	ns	7.14	2.73	ns	9.05	4.02	*	5.05	2.19	ns	7.09	2.02	ns
※2	なし	27.60	4.83		21.60	3.91		18.33	7.64		27.60	6.99		10.60	4.22		13.40	3.29		7.80	3.03		8.00	2.35	
職業	専業主婦	26.64	8.71	ns	18.43	3.20	ns	10.23	4.27	ns	23.57	5.14	ns	7.86	3.26	ns	10.07	4.70	ns	5.57	2.53	ns	7.36	2.02	ns
※1	会社員	25.56	4.45		18.67	3.50		11.00	6.95		22.11	3.98		6.67	3.20		9.11	4.25		5.33	2.73		7.22	2.22	
	パート・アルバイト	29.00	2.82		25.00	4.24		15.50	6.36		29.50	9.19		10.50	4.95		11.00	4.24		7.00	4.24		9.00	1.41	
	自営業	19.50	3.53		16.00	5.65		11.00	4.24		25.00	1.40		9.50	0.70		10.50	0.70		5.00	1.41		5.00	0.00	
家族内サポート※1	とても得られる	26.67	6.65	ns	18.30	2.51	ns	7.50	3.53	*	25.00	8.54	ns	8.33	4.04	ns	11.30	5.86	ns	6.00	3.60	ns	6.67	2.08	ns
	まあまあ得られる	26.33	4.50		23.00	4.58		22.50	3.53		26.60	8.32		10.67	5.77		12.67	4.16		8.00	3.46		8.33	2.88	
	あまり得られない	25.89	8.18		18.83	3.58		10.70	4.02		23.44	3.71		7.33	2.78		9.00	3.92		5.28	2.32		7.17	2.06	
	全く得られない	25.00	0.00		15.00	1.73		6.67	2.88		20.33	5.68		7.00	2.64		10.67	5.13		4.33	1.15		7.33	2.08	

※1 Kruskal-Wallis検定, ※2 Mann-Whitney U検定, **: p<.001, *: p<.05, ns: not significant

5. 育児負担の程度と PSI 下位尺度の得点 (表 5)

育児負担の程度と PSI 下位尺度では、子どもの側面では有意な差は認められなかった。一方、親の側面では、【親役割によっ

て生じる規制】で ($p < .05$) で有意差を認めた。多重比較の結果では、「軽度」・「中度」に対して有意に高く、「中度」が「軽度」より平均値が大きかった。

表5 育児負担の程度と PSI 下位尺度の得点

N=27																									
子どもの側面	C1 親を喜ばせる 反応が少ない			C2 子どもの機嫌の 悪さ			C3 子どもが期待 通りにいかない			C4 子どもが気が 散りやすい/多動			C5 親に付きまとう /人になれにくい			C6 子どもに問題を 感じる			C7 刺激に敏感に反応 する/物に慣れにくい						
	平均値	標準偏差	P 値	平均値	標準偏差	P 値	平均値	標準偏差	P 値	平均値	標準偏差	P 値	平均値	標準偏差	P 値	平均値	標準偏差	P 値	平均値	標準偏差	P 値				
	軽度	10.67	1.16		9.67	2.52		7.33	3.22		12.67	6.66		10.67	5.13		5.00	1.73		6.00	2.00				
育児負担 ※1	中度	12.83	2.14	ns	12.00	7.72	ns	7.17	3.49	ns	8.67	4.41	ns	7.33	3.27	ns	7.00	3.80	ns	5.17	1.84	ns			
	高度	13.61	3.57		13.50	7.06		7.72	2.76		11.28	4.39		10.28	4.11		7.22	3.98		6.56	2.36				
親の側面	P1 親役割によっ て生じる規制			P2 社会的孤立			P3 夫との関係			P4 親としての 有能さ			P5 抑うつ・罪悪感			P6 退院後の気落ち			P7 子どもに愛着 を感じにくい			P8 健康状態			
	平均値	標準偏差	P 値	平均値	標準偏差	P 値	平均値	標準偏差	P 値	平均値	標準偏差	P 値	平均値	標準偏差	P 値	平均値	標準偏差	P 値	平均値	標準偏差	P 値	平均値	標準偏差	P 値	
	軽度	18.67	2.08	*]	15.33	3.06		9.67	4.51		22.00	4.58		7.33	2.89		7.33	3.22		4.67	1.53		5.33	0.58	
育児負担 ※1	中度	27.83	4.45		18.33	4.32	ns	10.17	4.36	ns	21.33	5.92	ns	6.83	2.48	ns	9.33	4.59	ns	5.17	2.56	ns	7.67	2.50	ns
	高度	26.50	7.60		19.56	3.57		11.50	5.85		24.67	4.69		8.17	3.60		10.44	4.25		5.83	2.73		7.44	1.98	

※1 Kruskal-Wallis検定, *: $p < .05$, ns: not significant

6. 子育て支援センターに認知と利用について (表 6)

子育て支援センターを知っているが 88.9%, 知らないが 11.1%であった。子育て支援センターの利用あり 73.1%, 利用なし 26.9%であった。利用したことがある母親は1回のみが 36.8%, 2~3回程度が 52.6%, 5回以上が 10.5%であった。利用理由(複数回答)は、インターネットでリサーチが 43.0%と最も多く、次いでママ友との育児についての情報交換 18.0%, 誘われたから・リフレッシュできるが 11.0%, 身近に利用できる・同年代の子どもと遊ばせるが 7%, 専門家による支援が 1%であった。

表6 子育て支援センターの認知と利用

		N=27	
		n	%
子育て支援センターの認知	知っている	24	88.9
	知らない	3	11.1
利用の有無	あり	19	73.1
	なし	7	26.9
利用頻度	1回のみ	7	36.8
	2~3回程度	10	52.6
	5回以上	2	10.5
利用理由(複数回答)	リフレッシュできる	3	11.0
	身近に利用できる	2	7.0
	専門家による支援	1	3.0
	同年代の子どもと遊ばせる	2	7.0
	ママ友との育児についての情報交換	5	18.0
	誘われたから	3	11.0
	インターネットでリサーチ	12	43.0

IV. 考察

本市で子育て支援子育てサロンを利用する母親は、年齢は 20 代が多く、51.9%が専業主婦で 85.2%が核家族世帯であった。

対象の背景別に PSI 下位尺度ごとの平均点を比較した結果、子どもの側面で有意な差が認められたのは、親の年齢が 35 歳から 39 歳の年齢が高い母親と【子どもの気が散りやすい/多動である】であった。PSI 育児ストレスインデックス手引き¹¹⁾によると「子どもの側面」の高値は、親役割を果たすことを困難にさせるような子どもの特性と関連しているとしている。高橋は、生後 6 か月頃からの子どもの発達の特徴は、母親の育児困難感を高める要因となる¹³⁾と述べている。少子化や核家族化により育児経験のないまま親となり、育児支援者の不在や人間関係の希薄化などがあり子育て不安や育児ストレスを生じさせる要因となっている¹⁴⁾。また、育児教育については 1993 年以降に子どもの発達、福祉育児教育が行われるよう教育カリキュラムが組み込まれた¹⁵⁾。そのため子どもの行動特性を受け入れる精神的ゆとりがなく、子どもの身体や成長・発達・行動などの問題に注目しやすいことが考えられる。さらに育児が難題と思えば思うほどストレスが高く、多動な子どもに対して母親はエネルギーを使い果たし不眠状態になることが推測される。田中は、母親が日々変化していく子どもをありのままに把握・理解し、発達段階や状況にあった対応ができるように支援していくことが重要である¹⁶⁾と述べている。このように母親のストレスを的確

に把握して援助することや子どもの発達上の問題が生じていることが考えられる場合は、早期に連携や支援が必要である。

一方で、「親の側面」の高値は、ストレスの原因や親子システムの潜在的な機能不全が親機能に関連していることを示しており、育児課題に対し苦しめられ、能力がないと感じている。「愛着」「社会的孤立」

「配偶者との関係」において高値を伴う場合は虐待の可能性がある¹¹⁾。本研究の調査対象は、「社会的孤立」の平均値はやや高いが、高値ではなかった。また「親としての有能さ」について平均値が高いことから育児について肯定的に育児に取り組んでいることが推測される。

職種では、「会社員」で【親を喜ばせる反応が少ない】に有意な差を認め、この尺度は親の肯定的な反応をもたらすような親子の相互作用の度合いを示す¹¹⁾。会社員は、家族や保育園など他の人に預ける機会が多いことから専業主婦より子どもと過ごす時間が短く、相互作用の機会が少ないことが推測される。そのため子どもと過ごす時間をより密に向き合えるように支援する必要がある。

配偶者がいない母親は、子どもの側面で【親に付きまとう/人になれにくい】【刺激に敏感に反応する/物に慣れにくい】で有意な差を認め、配偶者がいない場合は、子どもは特定の大人としか接する機会がない

ため、人見知りや警戒心が強くなる可能性がある。いずれも子どもの気質や発達段階の特徴に基づいた行動であることを説明するなどの支援が必要である。親の側面では、【退院後の気落ち】で配偶者がいる母親に有意な差が認められた。このことは、出産後の育児について不安やストレスを感じてストレスが高くなったと推測されるため配偶者のみならず家族のサポートや専門家・行政による支援が必要である。

家族内サポートレベルに関しては、親の側面では「まあまあ得られる」方が【夫との関係】で有意差を認めた。これは、サポートの仕方やサポートをして欲しいこととの相違などが考えられる。夫に対する不満は夫との関係性が推測される。石らは、母親の意図・感情をうまく伝えるためのコミュニケーションスキルが必要¹⁷⁾であり、夫婦の対話の中で、父親のできる育児家事の具体的な役割分担や育児観の共有、さらに母親の育児上の課題や父親に求めている内容を明確にしていき、お互いの意志疎通を図っていくことも重要である¹⁶⁾としているため、夫婦間でのサポートの現状を把握しながら支援をしていくことが求められる。

育児負担では、親の側面で【親役割によって生じる規制】に育児負担が「中程度」ある母親に有意な差を認めた。このことは、育児負担が中程度ある母親は、生活が

育児中心で自分の自由な時間がなくストレスを感じていることが推測される。前述のように大原は、虐待を防ぐために母親の育児負担感の軽減が必要⁶⁾であり、岩淵らは育児負担感を軽減するには、サポート不足、子どもの特性、育児知識と育児技術を対策すること¹⁸⁾と述べている。また田中は、具体的対策として子育て世代包括支援センター（日本版ネウボラ）の活用、子育て支援コンシェルジュに相談、教室・集いの場を紹介、ファミリーサポートセンター事業を活用、子どもを預けて自分の時間を確保し、やりたいことを行う等、子ども中心の生活からの転換を図り¹⁶⁾、さらに光盛らは、虐待予防には地域支援に加え、母親自身の問題を母親自身が取り組める方向へと解決する必要⁸⁾があるとしている。このように、育児負担を軽減するために社会資源の活用など、母親がリフレッシュでき自己肯定感をあげることができるような働きかける必要がある。

子育て支援センターの認知と利用では、子育て支援センターを知っている 88.9%、知らない 11.1%であった。利用したことがある母親は 1 回のみが 36.8%、2～3 回程度が 52.6%、5 回以上が 10.5%であった。本市では、母子手帳交付時に市の子育て情報提供を掲載した妊娠・出産・子育てガイド「はちまむサポートブック」⁹⁾を配布しているが県外からの移転してきた

母親などにも周知していく必要がある。荒木らは、子育てサロン参加後の悩みや疑問の解決策については、同じような状況におかれている母親たちが自分の悩みや疑問を聞いてもらうことにより疑問や悩みが解決でき、他の母親の相談に乗り解決することで自己効力が高まった¹⁹⁾と述べている。利用回数を増やし母親同士の交流ができるような対策を講じて虐待の発生を予防する必要がある。利用理由では、専門家による支援がわずか1%であった。子育てをしている母親が手軽に支援を受けられるように、専門家による支援の充実と多くの母親が交流できる場の設置・提供を図る必要がある。利用理由でインターネットでのリサーチが多いためインターネットを活用した相談支援の方法も検討する必要がある。

VI. おわりに

本研究では、地域における子育て支援に関する現状と課題として子育てサロンを利用している母親を対象として、育児ストレスと子育て支援の課題を検討した。

育児ストレスは、年齢の高い母親の親役割を困難にさせるような【子どもの気が散りやすい/多動である】といった子どもの特性と関連している。また家族内サポートレベルでは、【夫との関係】でサポートが「全く得られない」母親に比べ「まあまあ得られる」母親に育児ストレスが高い。育

児負担を中程度抱えている母親は【親役割によって生じる規制】がある。母親のストレスを的確に把握し、預かりなどの社会資源の活用など、母親がリフレッシュできるような支援が必要である。また子どもの発達上の問題が生じていることが考えられる場合は、家族のサポートや専門家による支援が求められる。地域社会で様々な世代の母子や家族が虐待を予防し健康的な子育てを実現できるような子育てへのサポートや地域子育て支援拠点の設置を検討していく必要がある。

VII. 課題

本研究では、対象者の経済状態と育児ストレスについて調査をしていない。今後は、経済状態との関連も調査していく。また、今回の調査は、新型コロナウイルス感染症の影響禍の調査であったため、感染者の状況により子育て支援拠点の利用制限や閉鎖もあり調査人数が少ない。今後は、調査の例数を増加し、また子育て支援拠点を利用していない母親や孤育の母親への調査が必要であり育児支援を検討していく必要がある。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に心から感謝申し上げます。尚、本研究は、イノベーション助成を受けたものである。

利益相反

本研究に関する一切の利益相反は有さない。

文献

- 1) 厚生労働省：地域子育て支援拠点事業
<https://www.mhlw.go.jp/content/000666540.pdf> (アクセス 2022.12.1)
- 2) 厚生労働省：児童虐待相談対応件数 www.orangeribbon.jp/info/npo/2018/09/29-3.php (アクセス 2022.12.1)
- 3) 厚生労働省：子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について（第14次報告）
（社会保障審議会児童部会児童虐待等要保護事例の検証に関する専門委員会）（平成30年8月 https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000173329_00001.html）
（アクセス 2022.12.1）
- 4) 八戸市子育て支援課：八戸市における児童虐待の現状
児童相談所における児童虐待の相談件数【統計】平成28年度福祉行政報告例
<https://hoikushi-taisaku.com/gyakutai-toukei/> （アクセス 2022.12.1）
- 5) 原田正文：子育ての変貌と次世代育成支援 名古屋大学出版会 名古屋 28－226
2006.
- 6) 大原美知子：母親の虐待行動とリスクファクターの検討
－首都圏在住で幼児をもつ母親への児童虐待調査から－
社会福祉学 第43巻 第2号 46-57 2003.
- 7) 笹川拓也：地域社会における子育て支援の現状と課題 －子育て支援制度の変遷と子育て家庭の現状について－ 川崎医療短期大学紀要 34号 13-18 2014
- 8) 光盛友美，山口求：養育期における母親の子ども虐待の予防に関する研究
－ベビーマッサージを体験した母親と体験していない母親との比較検討－
日本小児看護学会誌 18巻 2号 22-28 2009.
- 9) 八戸市の子育て世代包括支援センターの取り組み：平成30年5月29日子育て支援課 www.city.hachinohe.aomori.jp/index.cfm/28,121643,232,html (アクセス 2022.12.1)
- 10) Abidin, R.R. : Parenting Stress Index-Manual. Pediatric Psychology Press, 1983.

- 11) 兼松百合子, 荒木暁子, et al: PSI (Parenting Stress Index)
育児ストレスインデックス手引き 社団法人 雇用問題研究会 東京
- 12) 奈良間美穂, 兼松百合子, 荒木暁子, et al: 日本語版 Parenting Stress Index
PSI の信頼・妥当性の検討. 小児保健研究 58 (5) 610-616 1999.
- 13) 高橋有里: 乳児の母親の育児ストレス状況とその関連要因
岩手県立大学看護学部紀要 9 31-41 2007.
- 14) 上野恵子, 穴田和子, 浅生慶子, et al: 文献の動向から見た育児不安の時代的変遷
西南女学院大学紀要 vol 14 185-196 2010.
- 15) 井上明子, 石原留美, 松村恵子: 助産師の視点から見た児童虐待の背景
香川県立保健医療大学雑誌 第2巻 93-100 2011.
- 16) 田中恵子: 1歳6か月児健診を受診する母親の育児ストレスの分析
日本版 Parenting Stress Index-Short Form の自由記載に基づいて
千里金蘭大学紀要 17 103-110 2020.
- 17) 石曉玲, 佳田恵美子: 夫婦間コミュニケーションの視点からの育児不安の検討
ー乳幼児をもつ母親を対象とした実証的研究ー 母性衛生 47 (1) 222-229
2006.
- 18) 岩淵祥子, 奥沢聡子, 神川洋平, et al: 母親の育児負担への寄与因子の検討に関する研究 信州医誌 57 (5) 155-161 2009.
- 19) 荒木奈緒, 安藤由美子, 梅本智子, et al:
出産病院で実施される産後1~3ヵ月の母親を対象とした子育て支援活動の効果
母性衛生 57 (1) 183-190 2016.

筆者紹介

坂本保子 八戸学院大学健康医療学部 准教授